

時の過ぎ行くままに (3)



「炉ばたセイ談」にかけた貞子さんの夢

桐野 三郎

※ 噛み合わない夜

夕食が終わったテーブルの向う側。久しぶりにやってきた中2の孫(男)と母親(ぼくの娘)が、何やら高校進学について相談し合っている様子。こちらはまだ終わっていない晩酌の焼酎グラスを片手に、テレビを横目で見ながら聞くとともにしに聞いている。

「グローバル化のスピードは早いわよ。これから先は英語べらべらでなきやもう生きていけない時代よ。社内公用語が英語なんて会社はどんどん増えていくんだから——」

——なるほど。だけどそんなに増えていく

だろうか? 「格差社会って分るでしょう。お金持ちと貧乏人の差がますます広がっていくの。就職だってよっぽど頑張らないと、正社員になれなくて一生派遣社員のままなんて人もたくさんいる時代だからね。来年は高校入試に向けて全力投球よ。いいわね!」

——なるほど、なるほど。子供たちもたいへんだが親もけっこうたいへんな時代なんだよ。

「でも、久しぶりに来たんだからお爺ちゃんの意見も聞いてみたら?」

やがて娘は、回答をぼくの方に振り向けてくる。だが、もともとこの種の話題で娘たちと意見が一致することはほとんどない。とことん議論すればするほどケンカ腰になってくるのだ。娘のほうは娘のほうで「また時代おくれの古くさい理屈ばかり並べて——」と思うのだろうが、こちらはこちらで「まだまだ

人生の何たるかがまるで分かっている。困ったもんだ！と苛立ってしまうというわけ。いつも消化不良で後味の良かった例がない。

だがここは売られたケンカ。いや、まさかそういうわけでもないだろうが中2といえ、あの戦争が終わった夏のぼくがまさにそうだった。(こんなに幼かったのだろうか？ 夜な夜な「死」を考え続けていたあの頃の俺が) そんな感慨もあつてテレビは諦め、孫に向き直る。もちろん焼酎グラスはそのままちびりちびりやりながらだ。

「うん、さつきからちらちらと聞いていたけど、お母さんの言うとおりでと思うよ」と、まずは娘の顔を立ててから、

「だけどお母さんが考えているこれから先— という未来はせいぜい十年先か二十年先ぐらいのことだと思ふんだ。だけど君が考えなければならぬ未来というのは五十年先か六十

年先のことだろうか？ そんな先のことには誰にだつて分かりつこないのだから、そんなに難しく考える必要はないさ。まずは良い友人をたくさんつくつて伸び伸びと青春を楽しむことが先だよ」と、ここはやはり本音で応えざるを得ない。

「でも英語はやっぱりこれから絶対必要？」
「いやいや、英語だつて日本の学校で教える基本をしっかりと勉強しておけば大丈夫。英語圏の国に入つてすこし馴れば話せるようになるんだから。俺だつて、はじめてアメリカに出張したとき一週間目にはもうそんなに不自由しなかつたからね」

かなりの誇張はあるが全くのホラでもない。「でも社内公用語が英語なんて会社が増えるんでしょ？」

「いや、僕はそう思わないね。いま日本に二社あるらしいけど、そんな馬鹿な会社、君が

大学を卒業するころには潰れているんじゃないか？ そんな心配するよりまず日本語で、堂々と自分の意見を言えるような勉強するところが先だよ」

「安定した職業ってどんな仕事だろう？」「ハハハ、そんな職業がこの世にあるわけないさ。そりゃ五年や十年は安定しているかもしれないが、君は四十年、あるいはそれ以上働かなければならないんだ。楽しく仕事をする条件は誰ひとつ『人生、好きなことをやるっきゃない』とシンプルに考えていればいいさ」

この辺までくると、孫の顔もかなり明るさを取り戻してくる。

「ついでにもう一つアドバイスしておくが、『不作為のミスだけは絶対に犯さない』という信念だけは持っていたほうがいいよ」

「不作為のミスってどんなこと？」

「あのとき『やっておけば良かったのに』と

後悔しても取り返しのつかないことをやらなかったという、そんなミスのことさ。たとえば君のクラスに仲良くならない素敵な女の子がいるとするだろう。それなのにいつまでもうじうじして声もかけられないーそんな失敗のこと。思い切って声をかけてみるぐらいの勇氣を持っていなくっちゃ一生後悔することになるぞ。いるんだろう？ そんな女の子」

照れているのだから、ここにきてはじめて孫は笑顔になった。「頑張ろうぜ。お互いにな」と、手を差し出すと「はい、有り難うございました」と元気よく握り返してくる。

これで爺いの役割はひと先ず終了というわけだ。

だがこの間、娘のほうはやはり自分の意見が完全否定されたようで面白くないのだろう。聞こえないふりをしてテーブルの反対側で家内相手に世間話に耽っている。

※ モノサシの違い

人間の幸、不幸は常に相対的な価値観ではない。どんな幸せもより大きな幸せに比べれば不幸だろうし、どんな不幸もより過酷な不幸に比ぶればまだ幸せ—といえるようにだ。

いまの時代を「厳しい競争社会を生き抜かなければならない不幸な時代」と把握しているらしいぼくの娘は、もちろん自分たちが体験してきた日本の高成長時代を基準にして現代を眺めているのだろう。それに対してぼくの場合は、どうしてもいわゆる「戦前」の暗い時代と比較して「いま」を考える。先ずは飢える心配がない。その上に自由にモノが言える平和が七十年近くも続いているのだ。日本の歴史はじまって以来最高に幸せな時代と把握しているわけである。ちっとやそつとの競争



なんてあって当り前。それを「たいへんな時代」などと吹き込むから却っておかしなことになるんだよ—と。つまり、子供の将来を考えてアドバイスしているという点で同じなのだ、思考の原点が違うと答えはこんなにも違ってくるというわけだ。

ぼくと娘とのこういう意見の食い違いを、俗に「モノサシが違う」という言い方がある。たしかに他人と意見交換するときには自分のモノサシだけで押し通そうとするとどうしても摩擦が生じやすい。ケンカ別れになったあげくには「奴とはモノサシが違う！」と匙を投げ出したりするときよく使われる。

もちろんその摩擦を解消するためには「多角的なものを見る力」—つまり時と場合にに応じて相手に分かり易いモノサシを上手に使いこなせる、そんな力（知性）が必要なのだろうが、知性とやたらに遠いのがわが家の家系の

ようである。

いや、それでもわが家の場合は、まだ嫌な顔はされても暴力や紛争にまで発展する心配はないが、最近は日本の政治家たちがひとりよがりのお粗末なモノサシを振り回し過ぎるのが危なっかしくて見ていられない―そう感じはじめているのは、ぼくだけだろうか？

※ 主観と客観の落差

「いらっしやいませ。毎度ありがとうございます。」

昔、百貨店の新人教育はまずこの接客用語の練習から始まった。奉仕課（という課があった）のベテラン女子社員の指導で練習を繰り返した後、各自の声をテープに吹きこんで全員の前で再生して聞かせるのだ。これは高卒、大卒、男女を問わない基本訓練である。

だがぼくは東京で大学生活を過ごした身、標

準語にもそこそこ馴れているはずだからと、

全く苦にすることはなかった。が、だ。ぼくの声が教室中に流れた途端にまさかの大爆笑が起つたのだ。五十人ぐらいたった新人の九割近くが女性である。彼女たちの視線がいつせいにぼくの方に向けられたときの恥ずかしさはいまもありありと記憶に残っている。

理由はもちろん、自分でもすぐ分かった。

すっかり発声しようという気持ちが強かったせいもあつたのか、ドスの利いた低い声が、まるで下っ端ヤクザが玄関口で客人を迎えるときの口上そっくりだった。正直に言つて自分でもびっくりする発見だった。つまり、主観と客観との落差はかくも大きいのか―と。

いや、こんな経験もぼくだけではないだろう。得意がつているポーズがはたから見れば滑稽でしかないケース。卑近な例を挙げさせてもらうが、東京都の猪瀬知事が先般、オリ

ンピック開催地誘致でライバルのイスタンブールの悪口を言って世界のひんしゆくを買ったときも、ぼくは反射的に自分のあの失敗を思い出した。つまり、自分を際立たせようという意識が先ばしつたばかりに、競争相手の悪口を言ってはいけないという禁じ手に触れて墓穴を掘ってしまったな」と。

だが、ここまでくるとついでに言わせてもらいたいのが、やはり日本の政治家の表情(けつして美醜ではなく)や態度のことだ。首相以下いちいち例を挙げたらきりがなが、朝夕のTVで目にするたびに(頼もしき)よりどうしても(不安)の方が増幅していくのだ。これもぼくだけではないはず。必要以上に力んだり威張ったりと肩に力が入り過ぎ、かと思えば笑う必要もないところで意味不明の笑みを浮かべてみたりと、どこかちぐはぐ。これでは日本の政治が三流といわれるわけだが、

これもつまりは己が、客観的に見ればどう見えているのかーが分つてないという実例だろう。又々百貨店の例を引いて恐縮だが「人間は一日に少くとも三、四回トイレに行く。トイレにはほとんど鏡がある。鏡に向き合う度に微笑んで、自分のどの表情が最も美しいかを勉強しなさい」と教えるものだった。一年間で一千回以上の練習ができるわけだ。あの政治家たちもなぜそれぐらいの努力をしないのだろうか? いや、本音をいえば「日本人としてサムライの風格を!」と申し上げたいのを、ばくはかなりハードルを下げて言っているのだ。いまやTVに映る表情は口元のしわ一本まで瞬時に地球の裏側まで届くという時代。しかも閣僚級の表情ともなれば、わが国に対する世界の好感度まで左右しかねないのだがー。

昨年京都を旅した折にバスガイドが、「カ

ラオケは歌う極楽、聞く地獄」といつて笑わせていた。カラオケではないがTVにて得意になっていいる政治家も、露出が多いほど人氣が上るとお考えのようだが、その逆もけっこう多いのではないか。



※ 戦争前夜のニオイ

ここ数年来、いや、もっとはつきり言えばカッコつけたがり屋の石原慎太郎東京都知事(当時)が、アメリカ議会で尖閣諸島を東京都が購入すると言い出して以来だが、日本中の空気が一変した。だが、といってもこれはぼくらの世代(戦中派)だけが感じ取る空気が漂い始めるが、いわゆる「戦争前夜」のニオイが漂いはじめたことが如実に感じられるのだ。

ぼくが生まれた年に満州事変(そう呼ばれていた)が始まり、小学校入学前年に支那事変が、さらに小4では大東亜戦争に突入、中2で日本中が焦土と化して敗戦に至るのだが、その間の記憶はもうかなり曖昧なのに、日常生活の中に流れていた空気感だけは妙にリアルに記憶の底にこびりついているのだ。殊に大東亜戦争(いわゆる二次世界大戦)に突入する前の空気はいまの日本とそっくりだった。それまでは話題にも上らなかつた相手国の欠点や汚点を次々に暴き出しては敵対感情を煽り、自国の正当性に賛同しない自国民すら敵視しはじめるといふ陰湿な空気。戦争前夜のニオイとはそんな空気感のことだ。「嫌中派」に対して「親中派」を差別しはじめたかと思えば、さらに「媚中派」などというもう一ランク上の敵役を設けて、アグネス・チャンや谷村新司という国際的なミュージシャンまで

槍玉にあげはじめた。いや、そればかりか、ちよつと相手国の長所や美点に触れたばかりに「利敵行為」とか「国賊」などという非難の言葉を浴びせる例も出てきた。おぞましくも、ある意味では懐しい少年の日の記憶が甦ってくる。

これはもう半年ほど前のことだが、東京在住の同級生（高校時）が久しぶりに帰省したのを機に地元勢三人との夕食会を開いた。男ばかりの席だけに酔いが回ると、話題やはり時局問題に向っていく。

地元勢の一人（税理士）が、自衛のために核武装すべきだという持論を展開し始めたのに対して、いま一人（面白いことに彼も税理士）が「何をバカな！尖閣なんてあんな岩だらけの島なんか中国にくれてやればいいんだ」と反撥して、議論はにわかには沸騰しはじめた。いや、沸騰したのはウソではないが、二人の

劍幕の激しさに中間派のぼくと東京からきた友人の二人は、半ば呆れながらほとんど聞き役に回ったのだが――。

同じ年齢で同じ時代に、しかも同じ税理士の世界で生きてきた二人なのに、こうも違う意見を確固たる自信を持って（そう見えた）主張しあう姿が驚きだった。たしかに二人の性格はかなり違う。核武装論者のほうは生真面目で融通性には欠けるかもしれないが、読書量を誇る勉強家だけに理論的にも完全武装しているつもりだろう。それに対して「尖閣不要論者」のほうは商工会やライオンズなどの活動で海外出張も多い上に、英語堪能で通訳もこなすという融通無碍の国際派。それにしても「多角的にモノを見る力」なら二人のキャリアや年齢などからも十分に備わっているもしいはずなのに――である。

だが、これもたしかにぼくの言う戦争前夜のニオイがするひとつの光景には違いないのだが、先に触れた少年時代の記憶とは天地地ほども異なる相違点があることだけははっきりしておこう。当時の日本は軍国主義の厳しい統制下、迂闊に「尖閣不要論」など漏らすものなら即、憲兵隊に連行される―そんな恐怖と隣合わせだったという一点である。今はもちろんそんな懸念などどこ吹く風、笑いのうちに論争を打ち切って二次会のカラオケでは懐メロの喉を競い合っていた。

そして、さほどうまくもない懐メロを聞いていると、浮かんでくるのはやはり「俺たちは自由にモノが言えるという、なんと平和な時代を生きていることか―」という感懐である。四人とも中2で終戦を迎えた仲だが、それまでは校庭正面の忠魂碑に、ぼくらよりちよっと前に生まれたばかりに戦場で散ってい

った先輩たちの名前が、次々に刻まれ続けていたのだ。

※ 戦争はもう始まっている

だが話がここまでくると「では戦争前夜の次は開戦？」と問われそうだが答はもちろん「ノー」だ。たしかに二十世紀は破壊と殺戮の時代だったがいくらなんでもこの人類があれほどの愚挙をいま一度繰り返すはずがないいや、そんな楽観論は別としても、いまや世界中には地球上の全人類を抹殺しても余りある核兵器が温存されているのだ。そしてその核がとりあえずは全面戦争の抑止力として機能していることも間違いない。

しかし、とはいっても地球上各国(東アジアの近隣国はもちろん)の文明発展の足並みは一様ではない。政治体制の異なる国々が平

和裡に共存するためには、まだまだ多くのト
ラブルを忍耐強くクリアしていかなければなら
ないであろうこともまた事実。という状況
下で、いまわが国に必要なキーワードはやは
り「外交力」しかないだろう。

そうなのだ。「外交は武器を使わない戦争
である」という言葉は情報が瞬時に地球上を
駆けめぐる現代、いよいよ現実味を帯びてく
る。その意味では、前項で「戦争前夜のニオ
イ」と書いたが実は「戦争はもう始まっている
」といったほうがより真実を衝いているの
かもしれない。そしてその外交を担っている
のはもちろん政治家だけではない。朝タメデ
ィアに登場する人たちの言動や、われわれを
含めた「世論」の動向までが重要な要素とな
っているわけだ。

そんな目で見ていまの日本は、この東アジ
アでの大きな戦争（大げさではなく天下分け

目の）を有利な展開に持ちこめているのだろ
う？

残念ながらこれも答は「ノー」だろう。あ
まりに思慮不足の凡ミスが多くて呆れること
が多い。触れる必要もない場面で靖国問題を
持ち出すかと思えば、いまさら聞きたくもな
い「侵略の定義」を講釈してみたり、かと思
えば一方にはひとりよがりの「慰安婦問題」
を持ち出す不見識な党首が出現したり―と外
交という戦場でもいまの日本はまだどこか頼
りない。

だが、さきの参院選では自民党が大勝。念
願の「ねじれ解消」にも成功したことだし、
今度こそ阿部政権の奮起に期待したいものだ。
これからの十年。ないし二十年が日本の正念
場ではないか。



※ 発信していきたい「希望」

ところで「炬ばたセイ談」も今回で第九号。振り返れば第六号までが初代編集長入来院貞子氏によるものだ。氏が二年前の五月に急逝、今年五月にはNHKテレビ「家族に乾杯」で「ご縁のできた、笑福亭鶴瓶師匠まで迎えて三回忌の法要が盛大に営まれたことは衆知のとおり。ぼくも末席に連なりながら貞子さんとの出会いを懐しむと同時に、彼女が「炬ばたセイ談」にかけてた夢に思いを巡らせていた。

同人誌と言えば、古いぼくらは夜な夜なガリ版切りに精出しながら創りあげていた高校時代が懐しいのだが、この「炬ばたセイ談」も創刊号の編集後記を読むと「大変お待たせいたしました」と、どこかそれに似たわくわく感が伝わってくる。続いて「先ずはお読み下さい。内容は硬軟、左右なんでもありの画期的なものとなりました」などと。

そもその母体となる「炬ばたセイ談会」も言い出しっぺは貞子氏。それに呼応する形で鹿児島ペンシルクラブの相星雅子代表以下が賛同してスタートした経緯を、創刊号に相星氏が書いている。つまり「炬ばたセイ談」は種子を播いたのも貞子氏なら水をやり続けた（編集）のも貞子氏。それが芽を出し、育ってきたのだから。「炬ばたセイ談」は入来院貞子氏が遺していった彼女の分身と言ってもいいのかもしれない。

しかし執筆者は多士済済。一家言を持つ人が多いだけに、ありきたりの「仲良しクラブ」とは空気が違い例会では激論が飛び交うことも珍しくない。創刊号の相星氏のエッセー「ぐぬぬぬぬ」というタイトルは、メンバーの中では最右翼、入来院重朝氏の「日本核武装論」に対する反撥の歯ぎしりだろう。相星雅子といえは「憲法九条を守る会」のリーダー、当

然の抵抗である。東アジアの国際紛争で緊張が続くいま、国の未来を憂える心情は誰しもあつて当たり前。むしろ、創刊号からこんな衝突が見られたのがいかにも「炉ばたセイ談」らしいと言つてもいいのではないだろうか。

そしてその貞子氏が最後の編集を手がけた第六号の編集後記（平成二十二年）で新会員の中西氏を紹介している。「鹿児島大学農学部名誉教授、鹿児島謡曲連合会会長中西喜彦氏に加わって頂きました。いよいよ会の幅が広がり、洛陽の紙価を高めることになるのではと期待するものです」と。まさか自分の運命を予感されていたわけではないだろうが、それからわずか一年を経ずしてご自身は他界。なんと、編集という難儀はその新会員中西喜彦氏に継承されて、いわゆる「貞子分身」である「炉ばたセイ談」は第七号、第八号と新しい命を誕生させてきたわけだ。

あの三回忌以来ぼくは、「洛陽の紙価を高める」なんて大それた望みは別としても「炉ばたセイ談」にかけた貞子さんの夢だけは大切にしたいものだ。いつも童女のように明るかった彼女の顔を思い出すことが多くなつた。そんな折りも折り、地元新聞紙上で出合ったほんの数行の言葉がひとつの啓示のようにぼくの目に飛び込んできた。創業百周年の岩波書店社長に就任した岡本厚氏を紹介した「かお」欄。出版社が果たす役割とは何かに対して「時間をかけて多角的なものを見る力、そして希望を発信していく」と答えている。

いや、なにも天下の岩波と肩を並べたいわけではないが、入院屋敷の一隅から生まれたい「炉ばたセイ談」も、形は小さくとも執筆者たちが目指す狙いは同じだろう。内容は硬軟、左右なんでもあり―を楽しませてもらっているのだが、その成果の評価者は何十年か

後のぼくらの子や孫の世代。せめて彼らの評価に耐え得るものが「何か」だけは常に念頭に入れておきたい。その明快な答えが向こうから飛びこんできてくれたというわけだ。「多角的にもものを見る力」はまだまだこれからだが、「希望」についてはぼくらだからこそ発信できるものがあるはずだ。対極の「絶望」しかない時代を知っている世代なのだから。中2の夏、八月十五日までぼくはその中であがいていた。

(エッセイスト)



第1号（平成17年）から第8号（平成24年）までの「炬ばたセイ談」